小正月（こしょうがつ）の行事

1．繭玉団子（まゆだまだんご）

養蚕業（ようさんぎょう）が盛んだった大和市では、1月14日に養蚕の上作を祈願して、米粉で作った団子を木の枝に刺して供える風習がありました。この団子飾りを繭玉・繭団子などといいます。

繭玉は14日の午前中に作ります。米粉をお湯でこね、丸型、繭型、里芋型、小判型などに成形しました。白色以外にも、赤・青・黄色に着色した繭玉を作ることが多かったですが、家によってはきれいな繭が取れるように願い、白色だけの繭玉を作るケースもありました。

作った繭玉は、13日に採ってきた楢（なら）や椚（くぬぎ）、栗（くり）、樫（かし）、椿（つばき）、榊（さかき）などの枝に刺して飾ります。繭玉を刺した枝を石臼の穴に挿して立て、神棚の前や床の間に供えました。木の枝を米俵に挿す家や、大黒柱に縄で括り付ける家もあったそうです。また、木の枝には繭玉以外に、ミカンや、最中（もなか）の皮のような米菓子を飾ることもありました。

セートヤキで焼いて食べる繭玉は、飾りに使ったものとは違うものを用意します。

郷土民家園での繭玉団子飾り

2.セート焼き

14日の夕方から晩にかけて、セート焼きが行われました。サイト焼き、ドンド焼きなどとも呼ばれる行事で、道祖神（どうそじん）の近くで正月飾り、古いお札、ダルマ、書き初めなどを燃やしました。燃やした書き初めが高く舞い上がると、字が上手になるといわれていました。

また、大きめの繭玉団子をセート焼きの火で焼いて食べる風習がありました。13日に採ってきた先が3股に分かれている枝に、繭玉を刺して焼きます。この繭玉を食べると、風邪をひかないなどといわれていました。また、蚕が上作だった家と繭玉を交換して食べるという地域もありました。繭玉を焼くのに使った枝は、持ち帰って家のジョウグチ（入り口）に立てかけておくと、泥棒除けや魔除けに効果があるといわれていました。

セート焼き（深見　坊之窪）
（大和市『大和市文化財調査報告書　第８集』
1982 年、89 頁）

3. セート焼きとヨーカゾー

大和市の下鶴間、深見、福田や、上和田の一部では、12月8日のヨーカゾーの日に、一つ目小僧が厄を落とす家を帳面につけ、それを道祖神に預けて2月8日のヨーカゾーの日に取りに来ると考えられていました。そこで、道祖神ごと帳面を燃やし、厄を落とす家をわからなくするためにセート焼きをしたといわれているのです。

しかし、上和田の久田では、帳面をつけるのが一つ目小僧ではなく道祖神であるといわれており、地域によって細かな違いがあります。